

JDA-DAT スタッフ養成研修（巡回栄養相談実践訓練）

研究教育事業部
高知県立大学 廣内 智子・島田 郁子

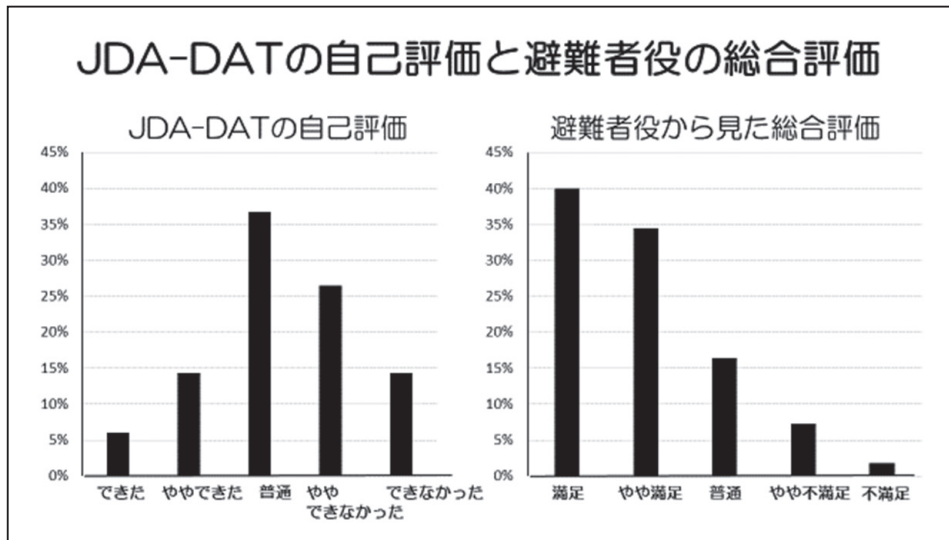
災害時の巡回栄養相談にて情報のずれが発生してしまうと、被災者のニーズを聞き出すことができず、真の栄養支援につながりません。そのため、普段から巡回栄養相談の実践訓練を行うことが必要です。今年、高知県栄養士会が主催するJDA-DAT スタッフ養成研修で、初めて巡回栄養相談実践訓練を実施しましたので、訓練内容及び参加者のアンケートの結果をご報告させていただきます。

平成30年11月4日（日）高知県立大学池キャンパスで巡回栄養相談実践訓練が実施され、26名の管理栄養士が参加されました。訓練内容は、参加者が2名1グループとなり、高知県立大学健康栄養学部の学生が演じる避難者役に対し巡回栄養相談を行いました。避難者役として、慢性疾患を有する方、外国人、高齢者、妊婦、乳幼児と一緒に避難してきた方、障害者、食物アレルギーを持つ方及び発災直後に体調不良を訴える方を設定しました。また、避難者役には、予め栄養に関する問題を仕込みました。例えば、イスラム教であるため豚肉が食べられず、日本語が分からない外国人、ワーファリン（抗血栓薬）を服用中であるためビタミンKが大量に含まれる食品に注意が必要な方など、様々な状況を設定しました。



参加者は、1時間以上にわたって、それぞれの専門知識とスキルを活かしながら栄養アセスメント、支援物資等の選定、本部への報告及びクロノロ訓練を実施しました。栄養相談終了後、JDA-DAT及び避難者にアンケート調査を実施し、全員でフィードバックを行いました。フィードバックでは、避難者役の学生から「支援物資を沢山もらったが、周りの人の視線

が気になった」「子供役を演じたが、羊羹をもらって違和感を覚えた」などの感想がありました。JDA-DATからは、「外国人とのコミュニケーションに苦戦した」という感想が多く、翻訳機能を活用してはどうかといった提案が出ました。アンケート調査の結果、JDA-DATの自己評価は「普通」と答えた人が37%と最も多く、避難者役の総合評価は「満足」と答えた人が40%と最も多い結果となりました。しかし、「やや不満足」「不満足」と回答した避難者も少なからず存在していました（図）。避難者



の自由記述では「他に困っていることはないですか？」と聞かれたが、それを聞くよりは具体的な助言が欲しかった」「支援物資を沢山もらうよりも具体的な助言が欲しかった」という今後、避難生活を送る上での具体的な助言を求める声が多くみられました。また、巡回栄養相談でJDA-DATが困ったことは何か？という設問では、避難者への栄養指導・助言（47%）が最も多い結果となり、JDA-DATもどのように助言して良いのか悩んでいたことが分かりました。避難者への接し方で気を付けたことは何か？の設問では、目線を合わせて話した（71%）が最も多い結果でしたが、個人情報周囲に聞こえないようプライバシーに配慮した（10%）、支援内容を避難者の前で打ち合わせないように配慮した（6%）と回答したJDA-DATは少ない結果となりました。巡回栄養相談は周囲への配慮が必要となる環境で行われるため、避難者のプライバシーに配慮することが大切です。また、避難者の目の前で支援者同士が相談することは、避難者の不安を煽ってしまい逆効果となるため、心情に配慮した栄養支援が必要となります。

今回の訓練を通して、今後、巡回栄養相談を円滑に実施するための今後の課題として、①外国人とのコミュニケーションの方法、②栄養補助食品等を提供するだけの短期的な支援ではなく、中長期を見据えた避難所生活の具体的な助言方法、③避難者のプライバシーや心情に配慮した栄養支援の仕方、この3つがあげられました。

